

# 榿の木だより

2023年1/1  
第109号

発行：榿の木福祉会（法人本部）

かしの木の会

一宮市富田字砂原 2147

Tel/Fax 0586-63-2111 / 61-1200

榿の木福祉会 ホームページ

<http://www.kasinoki.jp/>

ひとりひとりひかる

# きぼう



## 【目次】

- 1P 表紙、目次
- 2P 理事長 あいさつ
- 3P かしの木の会会長 あいさつ
- 4P 法人コーナー① 法人のコロナ対応
- 5P } 法人コーナー②「事業所行事」
- 6P }
- 7P }
- 8P かしの木の会コーナー、お知らせ

## 新年のごあいさつ

明けましておめでとうございます。

昨年は、過去の経験を超えた「新型コロナウイルス感染症」の感染拡大に右往左往した1年でした。各事業所職員や利用者、その家族の方々のご協力により感染拡大を最小限に抑えつつ新年を迎えることができました。改めて厚く御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の一宮市内における日々の感染者数も昨年8月中旬の1,150人をピークに減少傾向となりました。9月下旬ごろからは一宮市においても感染者数が100人を下まわる日が多くなりました。残念ながら、11月当初から1日の感染者数が200人を超える日が続くようになり、11月14日には「第8波」に入っていることを愛知県が認定しました。ゼロコロナの安心安全な生活を、1日も早く皆さんとともに取り戻したいものです。

本年度も、従前に続き法人の主な行事を開催できず誠に残念に思っています。また、利用者をはじめ、地域の方々にも申し訳なく思っております。そんな中でも、昨年度と同じように10月、11月にかけて事業所ごとに「日帰り旅行」を実施することができました。行き先、実施方法などを事業所ごとに工夫を凝らし、細心の注意を払っての実施でした。普段には見られない利用者の皆さんの解放感満ち溢れた姿、秋空に應える笑顔がとても素敵でした。

さて、榎の木福祉会は、昭和56年に社会福祉法人として産声を上げ、本年で42年目を迎えました。当時新築された「榎の木作業所」の施設も老朽化が進み、施設利用上の不便さや不快感の声が上がるようになりました。その上、耐震補強工事の必要性が検出され、もう、待たなしの改修工事の着手に迫られました。この工事を進めるにあたり、利用者が活動できる代替施設を用意する余裕はなく、施設を利用しながらの改修工事です。したがって、工期は、昨年11月から本年7月までの予定です。



榎の木福祉会理事長 北川 登

本法人の施設で最も古い施設が「榎の木作業所」の施設です。この施設より古い施設としては市から貸借された「チャイプ」、「ステップ」の施設があります。

「榎の木作業所」の施設に次ぐ施設は、「榎の木園」、「かしの木の里」と続きます。これらの施設の改修工事が次から次へと迫ってきます。しかしながら、これらの改修工事は、すべて自己資金で賄っていかなければなりません。改修費は小さな施設で5,000万円以上、「かしの木の里」などの4階建ての大きな施設であれば、2億円以上かかると考えられます。本法人にとっては、これから施設改修工事を背負う時代に入っていきます。この課題が、これからの法人経営にずっしりとのしかかってきます。

このことは、国の福祉政策の現状に大きくかかわっています。福祉事業拡大にともなう事業所新設工事については、国へ補助金申請ができます。国からの補助金交付が確定すれば、それにとまって県、市町村からも補助金がいただける仕組みになっています。この仕組みにより、法人負担経費は、総工費の1/8程度になります。しかしながら、改修工事に対する補助金制度はどこにもありません。

この課題は、築40年以上の施設を抱える法人であれば、いずれこの法人も同じような課題を背負うこととなります。法人の収入源は、福祉事業の実績により国や地方公共団体から支払われます。したがって、ほぼ全国一律の単価によって収入が決まりますから、どこの法人も、施設の維持管理の経費の捻出に困窮している状況に大差はないと思います。現状の報酬



単価でもって、施設の改修や新改築経費の積立てをする余裕はほとんどない状況であると思います。

現行の報酬単価の収入で、施設の改修や新改築費を積立てていくには、必要経費の大幅な削減をしなければできない。もし、施設の大改修を断行すればそこには、福祉支援の劣悪な環境の放置や虐待の温床と隣り合わせのような状況が生まれる危険性があります。新聞やテレビ等で報道される福祉現場における事件や事故の要因は、職員等に係る個人的要因もありますが、多くは法人経営に係る要因が多いように思います。本法人においては、現利用者の方々の支援の質をいかに充実させていくかを第一に考えた支援を心がけています。支援の質を落とさないで必要経費を削減することの困難さをひしひしと感じながらも、機会あるごとに、管理者や職員に必要経費の節約を呼びかけたりお願いをしたりしています。

現状の福祉政策は、福祉事業の拡大に重きを置いたものであり、福祉事業の安定経営をも意図したものは思えません。本法人は、これから施設改修が続く時代を迎えました。法人経営の創意工夫は言うまでもなく、利用者のご家族とともに、障害者福祉事業の制度改善に向けて声を上げていきたいと思えます。関係各位のご理解とご支援をお願いします。

本年こそ、コロナ禍の生活環境に慣れることなく、当たり前前の生活ができるよう、関係各位のご支援をいただきながら、福祉事業充実に向けて誠意努力してまいります。

本年も、引き続きご支援賜りますようお願いし年頭のご挨拶といたします。



## 新年のご挨拶

明けましておめでとうございます。  
本年もよろしくお願い申し上げます。

コロナ禍となったこの2年半もの間、本会は感染防止を念頭に活動を自粛してまいりました。

ワクチン接種等の対策によって感染防止対策にも厚みを増し、今夏の第7波では行動制限も無く、様々な活動が再開へと舵を切り始めています。

本会でも、来年度中の活動再開を目標に、現状に合った活動を模索し始めました。

模索する中、活動見直しの一環として、本会からの情報発信の方法にLINE配信を取り入れ、月間予定表等お知らせの配信を開始しました。

慣れない配信アプリの操作と格闘しながらの配信とはなりますが、普段直接お話しする機会の少ない中、会員の方から直接ご意見等を伺え、時には温かい労いのお言葉などを頂く事もあり、少しずつやりがいも見出されるようになってまいりました。

今後は、賛助会員の皆様へのLINE配信というような更なる活用を模索してまいります。

情報伝達方法以外にも、本会の活動のあり方には様々な課題が浮かび上がっており、一つ一つ協議を重ねて見直していきたいと考えております。

会員の皆様のご意見を拝聴させて頂きながら、抜本的な見直しを進めていく所存です。

今後、本会の活動に精進してまいりますので、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



かしの木の会会長 小杉 ひふみ

## 福祉会コーナー①

### 危機のときにこそ

#### 力を発揮できる法人でありたい ～コロナ禍の福祉の現場から～

「障害」のある人が安心して暮らせる社会にするためには何が必要なのか。もう何十年も考えてきたテーマですが、その答えは、新型コロナによってもたらされたさまざまな困難から、また一から考え直すこととなりました。

樫の木福祉会内でのコロナウイルス感染症は、2022年の年明けから徐々に広がり、2月には職員、利用者に30名を超える感染者が確認され、3月には一気に拡大し、入所利用者23名、グループホーム利用者14名、通所利用者7名、職員14名、合計58名にまで広がりました。

はじめて経験する緊急事態は、すべてが手探りの中での対応となり、連続して夜の勤務をする職員や、自宅に帰らず備えた職員もあり、みんなの協力でどうにか乗り切ったという感じです。いつ終わるかわからない状況の中、感染のリスクがありながらも必死に介護し続けてくれた職員たちの姿、泣きながら防護服に袖を通して現場に入っていく職員の姿、みんなの不安を一身に背負いながらも逞しく的確な指示をしてくれた看護職員たちの姿は、忘れることのできない光景です。

その後、4月にはいったんおさまりましたが、6月には再び入所利用者を中心に広がり（12名）、ホーム利用者2名、通所利用者2名、職員5名、計21名に感染し、8月には、通所利用者を中心に（23名）、入所利用者2名、ホーム利用者9名、職員25名、計59名となり、2022年は、コロナとの闘いに明け暮れた年となりました。

コロナ禍となって、福祉の職員が「エッセンシャルワーカー」と呼ばれ、みんなの生活を維持していくために、社会全体が自粛する状況となっても止めることができない仕事であることを再認識しました。他の職種のように、テレワークや在宅勤務なども難しく、障害福祉という特殊性は、密を回避するにも限界がありました。

そうした状況の中、感染によりサービス利用ができなくなる人や、重症化や家族への感染の不安から自主的に利用を控える人が増え、どこの事業所もサービス収入は減少し、一方で感染予防のためのマスクやアルコール、検査キットなどに莫大な経費がかかるようになって、事業所の努力で乗り切るしかない状況が続いています。ただでさえ福祉人材が減少する中、「エッセンシャルワーカー」と位置付けら

れた障害福祉が、どこか軽んじられているように感じるところであり、制度の見直しも期待したいところです。

ご自宅で家族に支えられている人たちの場合は、「緊急時のサポートがない」「入院のハードルが高い」という課題がクローズアップされました。

緊急時の頼みの綱である短期入所は、大半の事業所が受け入れをストップし、日常の暮らしも緊急時でも、その負担はすべて家族に押し付けられることとなりました。かしの木の里の短期入所は「必要な時にいつでも」を目標にしてきたので、コロナ禍であっても、法人の利用者の希望は断らない方針でやってきましたが、その頼みの綱の施設に感染者が出てしまえば、封鎖して対策するしかなく、唯一のセーフティネット機能が停止することになってしまいます。

いざという時に使えない福祉なんて、本当に福祉と言えるのだろうかという疑問を感じ、本人にとっても家族にとっても大変な時なのにと罪悪感を覚えながらも、この課題は単独型の短期入所にするなどの思い切った対策がなければ、解決は難しく、家族に感染者が出て、介護する人がいなくなった方の利用は、さらに難しい判断となります。

「障害」のある人が安心して暮らせるための仕組み作りというテーマは、震災を機に議論される機会が増えましたが、個別の避難計画や緊急時の支援計画などはどの地域も進んではいません。災害時や感染症流行時だけでなく、それぞれの家庭で起きる様々な緊急事態にも対応できるようにするには、どんな仕組みがあればよいのか。辿り着く結論は、最後に頼るべきはやっぱり人の力なのだろうということ。どんな緊急時であっても自分たちの役割を果たせる職員集団を作ることが、緊急時を乗り切る最良の方法なのだと。

コロナが収束した後には、以前よりも暮らしやすい社会になってほしいと願います。そのためには、コロナとの闘いの中、お互いを労り、励まし合うことで結束を深める機会にして、みんなの一大事のときにこそ力を発揮できる事業所になれるよう努力しようと思います。



法人本部 野崎 貴詞



## 福祉会コーナー②「事業所行事」

### 樫の木作業所 「牧歌の里の旅」

今年も利用者さんが楽しみにしている日帰り旅行のシーズンとなりました。樫の木作業所では、10月から11月にかけて4班に分かれ、ひるがの高原牧歌の里に出掛けました。

利用者さんには、事前に昼食のメニューと好きな活動を選んでいただきました。

昼食のメニューは、カレーライス、オムライス、からあげ丼の3つの中から選んでもらいました。

活動は、動物のえさやりとカフェでバイクドチーズタルト&ドリンクセットを楽しむ班と、手作りの名前ストラップ作りとソフトクリームを楽しむ班のどちらかを選んでもらい、どちらの活動もそれぞれ魅力的で、どちらにしようかなかなか決められない方もいました。

道中、利用者さんはバス内でスタッフと話をしたり、DVDでアニメを見ていました。ここ数年は新型コロナウイルスの影響で、バス内でカラオケを楽しむことができず少し残念に思います。

牧歌の里での各活動を紹介します。木ぼっくりミュージアムでは展示してある色々なオブジェを見て楽しめました。

手作り体験では各自好きなアクセサリや自分の名前の文字が書かれているパーツを選び、自分だけの名前入りキーホルダーを作りました。完成したものを嬉しそうにスタッフに見せたり、カバンに飾ったりされていました。



動物のエサやり体験は、普段見ない動物を目の前にして、少し怖がりながらも勇気を出して馬や羊、牛、ウサギ、鯉、アルパカにエサをあげていました。

4班とも天気に恵まれ、素晴らしい山の眺めや美味しいデザート、動物とのふれあいを楽しむことができ、良い思い出ができたと思います。

樫の木作業所 廣瀬 奏汰

### ステップ 「南知多ビーチランド」

ステップは10月17日と10月24日に、南知多ビーチランドに行きました。17日はあいにくの雨でどうなるかと心配していましたが、到着する頃には晴れてきました。

グループに分かれて自由に行動しました。イルカやアシカのふれあいコーナーがあったので、列に並んで参加しました。利用者さんたちも近くで見ることができ、とても楽しそうでした。怖がって近づけない利用者さんも、ほかの方が触っているのを見て恐る恐る触れ合っていました。

おもちゃ王国には乗り物もあったので、利用者さんが好きな乗り物を選んで楽しんでいました。

アシカ・イルカショーでは、アシカが観客席の通路まで来てくれたので間近で見ることが出来ました。利用者さんも大きなアシカを見て興奮していました。イルカがジャンプして、ボールにタッチしているダイナミックな姿が印象的でした。



日帰り旅行は、私が樫の木福祉会に入社して初めて利用者さんとお出かけする行事でした。普段利用者さんは働いているので、いつもと違う場所で楽しんでいる姿を見て私も楽しむことが出来ました。



今後も利用者の皆さんが楽しめるような行事が出来たら良いと思いました。

ステップ 浅井 美咲

## チャイブ「10月29日ハロウィン」

今年もかしの木フェスティバルが中止になった。

新型コロナウイルスが騒がれ始めて今年で3年目となるのだが、未だ収束の目処が付かない状況にある。それに伴い、様々な行事が今年も中止となっている。フェスティバルもその一つだ。去年もそうだが、ただただ中止にするだけでなく、その代わりとなる物を用意しようということになった。利用者が楽しむ事に焦点を当て、各事業所で進めていく事になった。

担当者と話し合い、いくつか案として出された中からチャイブでは「ハロウィン」をやろうということとなった。ハロウィンを行う上で、今までとは違う楽しみ方が出来るように考えていきたい、利用者はもちろん職員も楽しめる内容にしたい、そんな思いで進めてきた。

午前中はハロウィンの工作をし、昼食はピザパーティー、午後は手作りゲームをしてお菓子を食べた。



思い思いに書いた絵をその場で飾り、ゲームではかぼちゃを転がしボーリングなどをおこなった。普段の関わりとは違い、利用者が見せる表情も違った。その日一日、利用者も職員もそこにいたみんながひたすら楽しんでた。チャイブが笑いに包まれていた。

かしの木サポートプラザ 川口 孝行

## らちえっと「らちえっとフェスティバル」

11月19日(土)に、「らちえっとフェスティバル」を行いました。近年のコロナ禍において、数年前まで行っていた地域一体型の「かしの木フェスティバル」が実施出来ないということで、今回もらちえっと事業所単体での企画を室内で行いました。いつものレクリエーションと違ったような催しをして、利用者さんが大いに楽しめる内容を考えました。午前中は、「ウィンベルメジャレッツ」というバトントワリングの団体さんによる演技披露、午後からは任天堂のswitchを使ったバドミントン大会を行いました。室内に大スクリーンをつくり、それにプロジェクターで投影して、VR(バーチャルリアリティ)を体感しました。

午前のウィンベルメジャレッツさんによる演技では、とても華麗なバトントワリングを披露していただき、利用者みなさんも思い思いに楽器を鳴らしたり身体を揺らしたりして楽しまれていました。女性利用者さんは演者さんの素敵な衣装やバトン捌きに憧れを、男性利用者さんは演者さんの綺麗な姿と、リズムに乗る楽しさでとても満足していただけたかと思えます。



午後のバドミントン大会は、トーナメント方式で行いました。普段仲良く過ごしていただいている利用者みなさんですが、この時ばかりは相手に勝ったり、負けたりするゲームの楽しさを知ってもらおうと思い企画しました。皆さん真剣な表情で、勝った時は嬉しそうに、負けた時は悔いそうな表情で試合に集中されていました。優勝者には他の方より豪華な賞状を、それ以外の方にも一人一人賞状を用意して、みなさん全員が表彰され、満足していただけたのではないかと思います。

今回初の試みとして「らちえっとフェスティバル」を上記のように開催しました。利用者みなさんや職員の笑顔を見て、大事なものは場所や形式ではなく、「楽しい事をしたい、してほしい」という気持ちなのではないかと思えるような催しになったかと思えます。

これからも、いろいろな機会をとおして、利用者みなさんに今まで経験したことが無い楽しみも提供できたらと思っています。

らちえっと 森浦勲



## かしの木の里「SATO フェス 2022「翔」」

例年 11 月は「かしの木フェスティバル」を開催していましたが、昨今の新型コロナウイルス感染症の影響で中止となっていました。

今年は各事業所でフェスに代わる企画をとのことで「安全なフェスティバル」をかしの木の里としては【SATO フェス 2022「翔」】と題して 11 月 11 日（金）に開催しました

限られた人員と予算の中で利用者さんが最大限楽しむことができるイベントとして、「カラオケ大会」「ボランティアさんによるリズムレク」「参加者全員で風船を空に飛ばすバルーンリリース」を企画しました。

飲食店では、焼き鳥やジュース類、作業班（チャレンジ）で栽培したさつまいもを使用した「さつまスティック」を職員が製造販売しました。

更に、お祭りやイベントに出店している屋台による焼きそばやイチゴあめ等の出張販売の協力も得て盛りだくさんの内容で開催しました。



午前中は青空の下で利用者さんたちによるカラオケ大会を行い、自慢の歌声を声高らかに響かせてフェス会場を盛り上げてくれました。

午後からは、地域ボランティア団体「エッサ・ほいさっさ」さんによるリズムレクをしていただき、リズムに合わせて体を動かしたり、秋にちなんだ曲の演奏を披露してくれたりしました。リズムレクによる軽運動やダンスは利用者さんたちがステージの方に近付いてボランティアさんと一緒に全身を動かし存分に楽しんで見えました。



フェスのクライマックスは参加者全員が風船を空に飛ばすバルーンリリースです。これには利用者さんや職員が、思い思いのコメントを記したメッセージカードを風船に貼り付けて空に飛ばすもので、フェスの楽しさを伝えるコメントが見受けられました。一方でコロナの終息を願うコメントのほか、自由に外に出て活動したいなどといったコメントも見られ、普段の活動に少なからず制約がかかっている現状へのストレスも感じられました。そんなたくさんの想いを乗せた風船が雲ひとつない青く澄み渡った大空へ放たれ、100 個の風船は遙か上空へ舞い上がっていきました。（環境に優しいエコ風船を使用）

今回の SATO フェスは地域ボランティアさんや出店協力をしていただいた皆様のお陰で小規模ながらも盛大に開催することができました。

この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

コロナ禍の影響を受け、屋外で楽しむ機会が減っていた中で、少しだとは思いますが日頃のストレスから開放された利用者さんや職員の笑顔がたくさん見られ、活気に満ちた秋のひとつときになりました。



かしの木の里 鹿島隆好

## かしの木の会より

### “感染症感染拡大時対応用品の寄附の実施”

本年度10月、会員の皆様の多くの賛同を得て、榎の木福祉会様に対し、新型コロナウイルス感染症感染拡大時対応物品（防護服や高濃度のアルコール消毒液及びニトリル手袋）の寄附を実施いたしました。

障害者の施設内に一度感染が入り込みますと、その感染力も相まって思いもよらない速さで感染拡大が起こります。大変な中で、感染者対応にあたられた職員の方々の心痛は如何ばかりかと拝察いたします。

年度初頭に防護服等の緊急寄附を行った後、居住系の事業所の管理者の方から「高濃度のアルコール消毒液によって、感染者の対応にあたる職員にどれ程安心感をもたらしていたか」とお聞きしました。

第8波等、今後も幾度となく感染の波が訪れるのかもしれませんが、その際に、対応にあたる職員の方々が少しでも安心して対応にあたって頂ける一助となればと願い、今回寄附を実施した次第です。

この場をお借りして、多くの賛同を寄せて頂いた会員の皆様に対し厚く御礼申し上げます。

これからも変わらぬご支援の程、お願い申し上げます。

かしの木の会会長 小杉 ひろみ

### “赤い羽根共同募金活動”

令和4年10月2日（日）にスーパー三心三条店にて赤い羽根共同募金活動に榎の木福祉会とかしの木の会から代表が参加いたしました。当日は、写真のように晴天に恵まれる中、実施することができたことをご報告申し上げます。



### 広報誌バックナンバーのホームページ掲載

前号で、過去の広報誌について、創刊号まで遡ってホームページで閲覧できるよう進めていることをご報告いたしました。

まだ、お見せするには至っておらず、次年度公開を目指しております。進捗は「きぼう」で今後もお伝えしてまいりますのでよろしくお願い申し上げます。

### お知らせ

令和5年1月21（土）に予定しておりました榎の木交流会は、本誌製作中である12月時点で、コロナ流行の兆しがあるため、中止とさせていただきます。